

Ruhe (ルーエ やすらぎ)

Oktober 2012

28

The German House in Naruto

発行日 2012年10月31日
発行 鳴門市ドイツ館
編集 川上三郎
〒779-0225
鳴門市大麻町絵字東山田55-2
TEL:088 689 0099 FAX:088 689 0909
URL: http://www.city.naruto.lg.jp/germanhouse/
e-mail: doitukan@city.naruto.lg.jp

姉妹都市リュネブルク市 親善使節団の訪問

鳴門市とリュネブルク市は1974年に姉妹都市提携を結んでから中断することなく、毎年互いに親善使節団を交換しあっています。今年はリュネブルクの使節団が来日する番で、19回目の鳴門訪問となりました。

ドイツ館での行事は元々12日に予定されていたところが、出発地の悪天候により飛行機が遅れた影響で一日遅れの13日になりました。それでも予定されていたとおり、収容所跡地での地元の人との交歓や慰霊碑での献花、「バルトの庭」(映画「バルトの楽園」のロケ村)の見学を経て、ドイツ館へ到着しました。

ドイツ館では、まず屋外で小学生の金管バンド、保育園児の歌う「歓喜の歌」に迎えられ、そこでの皆様方の笑顔がとても印象的でした。その後館内で鳴門市美術協会とリュネブルク・パレット会との交流20周年の記念行事が行われました。その後館外の広場で地元住民の手作りの歓迎昼食会があり、それが終わってから再び館内に戻って2階の展示見学となり、その際特別展示にしておいたリュネブルク出身の捕虜フィンドルフのアルバム(別記事参照)も見てもらいました。このような当館周辺だけでも実に盛りだくさんの行事の後、ドイツ館を後にされました。なお使節団の団長コレ・リュネブルク市副市長からドイツ館へのお土産としてリュネブルクのパノラマ写真



国際交流員ロバート・テルシグの説明を聞く使節団(常設展示室で)

をいただきましたので、早速館内のニーダーザクセン州コーナーの一角に飾りました。

ところで一昨年リュネブルク独日協会から、青野ヶ原の元捕虜の制作したチターと手書のチター楽譜が鳴門日独友好協会に寄贈され、それが今ドイツ館に収蔵されています。この事は『ルーエ』第27号で書きました。一方、この寄贈をきっかけにチター演奏会も開かれています。10月14日の鳴門での歓送迎会において、リュネブルク独日協会のゲバル会長はこの『ルーエ』の記事に言及しながら、今年もその元捕虜のお孫さんにお願ひし、頂いたという収容所時代の記念品(当時のバリカンやナイフ2本とチターの印刷譜を何冊か)を鳴門日独友好協会の村澤会長に手渡されました。次回に詳しい内容のご報告ができるものと思います。



リュネブルク親善使節団と子供たち(ドイツ館玄関前で)



記念品の贈呈

ドイツ館史料研究会による ドイツ館の新ホームページ

鳴門市ドイツ館のホームページには従来、鳴門市公式サイトにあるものと、指定管理者が運営しているサイトの2通りがありました。そこにはドイツ館設置に至る歴史的背景の説明、館内の簡単な紹介、行事予定、利用案内、アクセスといったページがあるにはあるのですが、どちらかと言えばあっさりとした、簡素な記述ですし、当館の所蔵資料（展示しているものも、非展示の収蔵品も）についての紹介がありません。そこで、その欠落部分を補うべく、新しくドイツ館史料研究会が運営する「鳴門市ドイツ館」のサイトを立ち上げることになりました。



ここで、ドイツ館史料研究会について簡単に紹介しておきます。鳴門市ドイツ館は、一般的に言われる「博物館」に相当する施設ですが、博物館法に定義されている「博物館」ではありません。たしかに法律に規定されている事業の多くを同じように行っています。たとえば、「実物、標本、模写、模型、文献、図表、写真、フィルム、レコード等の博物館資料を豊富に収集し、保管し、及び展示する」とか「一般公衆に対して、博物館資料の利用に関し必要な説明、助言、指導等を行い」、「博物館資料に関する専門的、技術的な調査研究を行う」といったことです。しかし「博物館」として登録を受けるための要件のひとつである学芸員は置かれていません。その代わりに、資料の調査研究や展示に関する技術的研究と助言指導、あるいは案内書などの作成を行うべく市から委託を受け、事業を行っているのが「ドイツ館史料研究会」というわけです。それ以外に実はこの『ルーエ』も当研究会の事業のひとつですが、調査研究の一環として板東と徳島の収容所新聞の翻訳、原文の出版公開も大きな柱でした。これからは松山の収容所新聞に取りかかろうとしているところです。

さてこの新しいホームページですが、制作が完了したわけではなく、また内容が充実しているとはまだとても言えない段階ですが、あえて公開することにしました。もともと1年以上前に史料研究会の総会で立ち上げていくことを相談しながら、実現していなかったからです。一応簡単にサイトの構成を紹介しておきますと、「鳴門市ドイツ館の紹介」、「ドイツ館史料研究会」、「ドイツ館所蔵資料」、「ドイツ館刊行物」、それから史料研究会とは別組織ですが事務局がドイツ館に置かれている「青島戦ドイツ兵俘虜研究」刊行会」といったページを準備しています。このうち「所蔵資料」のページにはドイツ日本研究所の「板東コレクション」サイトに太刀打ちできるものを用意したいと考えています。写真をのぞく資料の概略については「鳴門市ドイツ館所蔵品目録」に収録されていますので、この目録を「ドイツ館刊行物」のページから当該ページに行くとダウンロードできるようにしました。さらに、前号でご紹介した『トクシマ・アンツアイガー』のCDに収められているファイルもほぼそっくりアップロードしました。ぜひご覧ください。新しいホームページのURLは次のとおりです。

<http://www.dt-haus.org/>

所蔵品紹介

今回は2種類紹介します。

最初をご覧のような、何の変哲もないような小さな木札（縦8.7cm、横5.6cm、厚さ0.9cm）です。しかしこれも当時の収容所生活をうかがう貴重な史料です。というのは、これは収容所を出入りする時の鑑札となっていたものなのです。板東俘虜収容所では所外に34,000㎡という広い土地を借り上げて、そこにテニスコート9面のほかサッカーなど各種スポーツグラウンド、菜園が設置され、その他にいくつかの養鶏場と2棟の音楽練習小屋もありました。この借上げ地に出入りする人数が多いため、出入りする度にいちいち名前を書かせる方式では煩雑で混乱を来すため、この方法を取るようになったそうです。

さて、木札の上部左にはH、その右には鳥と焼き印が押してあります。すなわちこれは、養鶏をする人ということです。その下の数字



は捕虜番号を示し、その内5は兵舎第5棟の居住者を表しています。このことから、他の史料の記述からヴァルター・エストマンということが分かります。ちなみに次に紹介するアルバムの元所有者エルンスト・フィンドルフは同じく第5棟で、しかもすぐ斜め向かいの部屋に住んでいました。千人ほどいた中で、こんなに近くの者同士の遺品がそろうとはちょっと驚きです。

新しく入手した写真アルバム

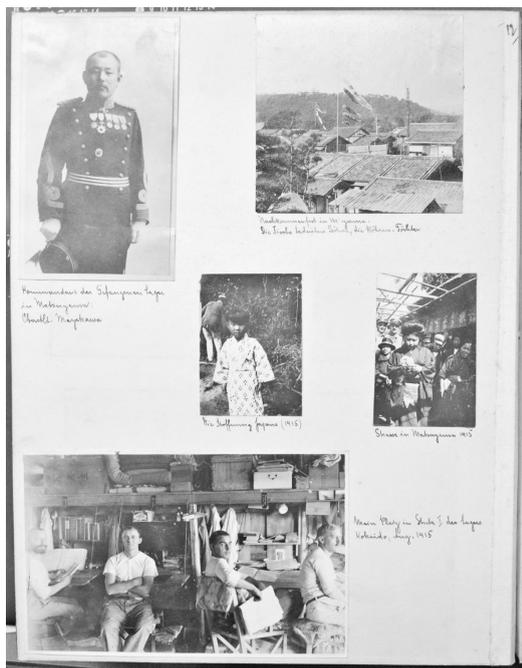
最近ドイツ館では板東俘虜収容所にいた元捕虜エルンスト・フィンドルフの写真アルバムを入手しました。この人は鳴門市の姉妹都市リューネブルクの出身で、その意味でも意義ある所蔵品になったと思っています。

彼は青島陥落後、松山を経て板東に来ましたので、このアルバムにはこれら3カ所の写真が含まれています。ドイツ館は当時の各地収容所の写真を多く所蔵していますが、写真アルバムとしては6冊でした（「鳴門市ドイツ館所蔵品目録」158ページ以下、あるいは新しい史料研究会のサイトでは

<http://www.dt-haus.org/publ/catalogPDF/Cat02-16.pdf>

に写真と簡単な紹介があります）。このうち2冊には板東の写

真はありませんでしたので、板東が写っているアルバムとしては5冊目になります。このアルバムに板東時代の写真はそれほど多くはなく、全部で32枚、その内8枚はすでに同じものが当館にあります。そう



アルバムの1ページ（松山収容所）

は言うものの、青島、松山を含め従来目にしたことがなかった写真も多く、貴重なものであることに変わりはありません。

写真そのものが貴重な資料であるのは当然なのですが、従来所蔵していたものと大きく異なり、また得がたい情報を与えてくれるのは、ほとんどすべての写真に対してメモが添えられていることです。このアルバムをご覧になった方は口々に「几帳面な方だったんですね」と仰っていますが、そのとおりだと思います。そのメモにはほとんどの場合撮影時期が書かれていて、

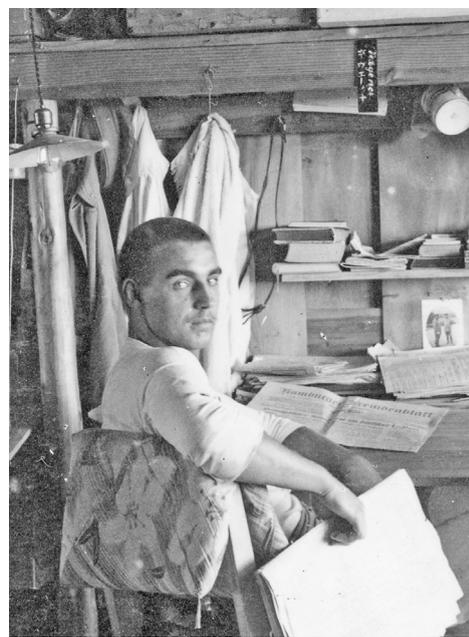
それは年だけであったり、年月であったりと様々ですが、従来撮影時期がなかなか特定できなかった写真についてもそれが判明するようになりました。これは松山収容所時代の話なのですが、メソジスト教会の日曜学校の生徒が2度慰問に訪れていません。当時の陸軍側の史料からその日時まで詳細にわかるものの、何枚かあるその時の写真がどちらの時期にあたるのか全く分かりませんでした。それが彼のメモのお蔭で判別できるようになりました。

あるいは板東収容所の外にあった菜園のトマト畑の写真には1918年7月という時期のほかに、「グレーテルが送ってくれたアメリカの種から育てたもの」という説明文があります。板東で栽培されていた各種西洋野菜の種はおそらく神戸や横浜の商店を介して入手したものと思われるのですが、個人的なルートで入手した種もあったということですね。



トマト畑（右下に種の由来が書いてある）

このアルバムからの収穫としてはさらに、ヴェーゲナーの写真が見つかったことがあります。ヴェーゲナーは松山収容所時代からいくつもの演奏会や朗読で美声を聞かせている人物で、演奏会プログラムや板東俘虜収容所新聞『ディ・バラック』



ヴェーゲナー（上の棚に名札が見える）

の中でたびたび名前を見かけます。何よりもベートーヴェン第九交響曲の日本初演となる演奏会で独唱を担当しています。このプログラム中独唱者の先頭にその名前が書かれていることから、本来ソプラノにあたるパート（テノール1）を歌ったものと推測される人物です。

このアルバムには他に家族、友人、恋人の写真も含まれます。板東の自室で撮った写真には背後に額に入った女性の写真が写っています。それとそっくり同じ写真(母の肖像)を別のページに見つけた時は、これが板東で飾られていたと思うと、なんとも不思議な感動を覚えました。



板東俘虜収容所居室内のフィンドルフ（右）

2つの慰霊碑

ドイツ本国やドイツ大使館、総領事館から賓客が来たとき時に必ず立寄り、献花する場所が鳴門市ドイツ館近くにあります。板東俘虜収容所跡地の池のほとりにある2つの慰霊碑です。ひとつは1919年にドイツ兵捕虜自身の手で建設された板東（および松山、丸亀）で亡くなった11名の戦友を慰めるための石碑であり、もうひとつは1976年に建てられた全国の収容所での死者



慰霊碑前で（手前は合同慰霊碑、奥が捕虜建設の慰霊碑）

87名を祀る合同慰霊碑で、古い慰霊碑のすぐ隣に建っています。今年6月3日（日）に鳴門市の第九演奏会に合わせて、ドイツ連邦共和国大使館付き武官グート大佐が鳴門市を訪問。収容所跡地の2つの慰霊碑に平野副市長と共に献花しました。

2012年4月～10月に行われた行事 (主なもの)

- 4月6日（金）～15日（日） ドイツイースター展
- 5月1日（火）～14日（月） ワイン紹介展
- 5月3日（木）～5日（土） ドイツワイン祭り
- 5月16日（水）～27日（日） 鉄道写真展
- 5月16日（水）～27日（日） 鉄道写真展
- 5月26日（土）・27日（日） 鉄道会
- 6月10日（日） 東日本大震災復興支援チャリティイベント
- 7月7日（土） セタコンサート
- 7月29日（日） 第九の里コンサート
- 8月1日（水）～31日（金） ドイツさんの生活展
- 8月12日（日）～14日（火） ドイツビール祭り
- 8月25日（土） こどものおんがく館
- 9月2日（日） 赤十字被災地の子どもたち交流支援
- 9月16日（日）・17日（月） ドイツフードメッセ
- 10月6日（土）～28日（日） 鳴門市美術協会とリュネブルク・パレット会との交流20周年記念展
- 10月6日（土）～28日（日） 特別展示「ロバート・テルシグがおすすめるニーダーザクセンへの旅」
- 10月20日（土） ヴァイオリンとピアノの調べ
- 10月28日（日） ドイチェスフェスト in なんと

👁️ 編集後記

今年の夏も猛暑でしたが、真夏の暑さもさることながら、9月になってもなお暑さが居座るのには閉口しました。しかし10月も半ばを過ぎ、鳴門でもかなり涼しくなり、ドイツ館の裏山にも紅い葉がちらほら見かけられるようになって秋らしくなりました。今年は昨年のような鳴門市ドイツ館（史料研究会）主催のコンサートもなく、『トクシマ・アンツァイガー』を何とか、CDによる電子出版という形にせよ公にし終えて編集子も少々気がゆるみがちになっています。それでというわけでもありませんが、ドイツ館史料研究会独自のサイトを作り、充実させるべく手をつけたところです。